

# バイリンガリズムと移民文学

——水野真理子氏へのコメント——

日比嘉高

## はじめに——移民地という場

バイリンガリズムが移民文学と取り結ぶ関係にはさまざまな形がありうるし、アプローチする方法にも多くの道筋がありうる。本稿は、水野真理子氏の発表にコメントするために準備されたものであり、バイリンガリズムと移民文学の交点を探るため、あらかじめいくつかの視角を用意しようと試みたものである。

移民地に生きる人々がどのような多言語状態の中にあっただのか、ということの整理からまず始めよう。一世であれ、二世であれ、彼らは多かれ少なかれ一言語で生活するモノリンガル・スピーカーではなかった。もちろん、その様相はさまざまで、個人的な言語能力の高下も関係していただろうし、農地で働いている人と商店主とでは、人との接触の仕方が全然違ったなどという環境も関係していよう。日本で受けてきた教育、アメリカで受けた教育によっても異なっただはずだ。「移民地の多言語環境」と一口に述べることはできるが、実際には多様で幅広い状況、そしてその状況のなかで生きた人々がいたというところから出発しなければならない。移民文学とバイリンガリズムとの交点は、環境の中から生み出されるのである。

## 作者のバイリンガル性

最初に、文学作品の作者のレベルにおけるバイリンガル性を考えてみよう。どのようなパターンがありうるだろうか。

まず、日本人移民（もしくは在米の日本人）ではあったが、日本語ではあまり作品を書かず、英語で書いた人々がいた。例えば野口米次郎。彼は在米時代、移民地の日本語メディア——サンフランシスコの『日米新聞』であるとか『新世界』——には書かなかった。英語で書いて、英語の詩の出版で成功した、そういうタイプの人がある。他には、詩劇『Creation Dawn』（1913）などを書いた菅野衣川もそうだろう。

前田河広一郎も、1912年に社会主義系の米国雑誌『The Coming Nation』に、「The Hangman」という英語の短編を書いている。これは大逆事件のことを書いた珍しい小説である。こうした英文の小説を書いてみたかと思えば、前田河は日本に帰国してからは、左翼系の小説を書いたり、移民関係では「三等船客」という中篇を日本語で書いたりしている。

永井荷風はどうだろう。荷風は英語では作品を残していない。彼は米国に5年程滞在し、その後フランスを経由して日本に帰り、その後は日本の作家として生きた。一般的にはフランス文学からの影響が色濃いとされる作家だが、個人史としては米国滞在のほうがずっと長い。だが、

彼が米国で熱心に勉強していたのは、フランス語だった。フランス人の家庭教師をつけ、フランス語で手紙を書く。もちろん日常生活では彼は銀行員だった。正社員ではないが、銀行の雇いであったため、英語を使わざるを得なかった場面は当然あっただろう。さらに一方で、荷風は日本語で小説を書いて、日本に送るといようなこともやっていた。

例えばこのような永井荷風の例をとっても、バイリンガルな状態、あるいはトリリンガルな状態というのは、作品とそれほど直結しているわけではない。作者の言語能力や、置かれた環境がそのまま直接的に作品にはね返るといわけではないのである。

### 読者のバイリンガル性

作者と対になる、読者のバイリンガル性も考えてみよう。移民地にいる読者の言語能力は、各々多様であったはずである。二次的に習得した外国語を「読む」ということと、「書く」ということと、「話す」、「聞く」ということは、難しさが異なる。日常的な会話レベルはさほど難しくなくても、こみ入った議論は難しい。文法的に誤りのない文章を書くというのはこれも難しい。それよりは読むほうがずっと簡単である。バイリンガルといってもさまざまな異なりがあり、文学作品にかかわるバイリンガル性を考える際には、そうした「読む」「話す」「聞く」「書く」ことにまつわる多様な差異を抱え込んでいた読者たちを想定しなければならない。日本語新聞しか読むことができなかつた読者もいれば、英語の新聞や英語の出版物を読める読者もいただろうし、あるいは永井荷風のようにフランス語を読める者もいただろう。読者のリテラシーにおけるバイリンガル性というようなものも、考えてよいのではないだろうか。

### 文体のバイリンガル性

次に考えてみたいのは、文体のバイリンガル性である。文学作品の言葉が、何語を使ってどのように書かれているかということである。米国の移民地で、ある作品を書くということを想定してみる。日本語を選ぶか、英語を選ぶかということがまずは選択肢となる。日本語を選べばふつうはその文章はすべて日本語で書かれる。英語を選べば、英語となる。ところが二つの言語を使える場合には、言語が混淆した文体も選ぶことができる。

わかりやすいところでは、単語が混じってくる。移民の文学を読んでいくと、日本語に置き換えにくい言葉や日常生活に入り込んでいる英語——例えば強制収容所時代であれば「キャンテン」(売店 canteen) だとか、「メスホール」(食堂 mess hall) だとか——が作品中に現れる。

単語レベルだけではなく、文体的に影響を受けることもある。最近では、詩人の伊藤比呂美が米国の日系人に取材した興味深い詩を書いている。

われわれは探している、場所を、N 瀬と呼ぶ  
そこは、私のおじいさんの住んでいた土地  
われわれは調べた、そこを、そしてみつけ出した  
それを、その土地は消滅してしまったということを

われわれは思っている、行くのである、取って、バスを  
今日これから、と

（「鰻と鯰」『現代詩手帖』54巻9号，2011年9月，p.20）

言語としては日本語で書いているが、語順が英語的になっている。古い例では、谷譲次の「めりけんじゃっぷ」シリーズが、大正時代にある。これは日系移民たちが当時使っていた言葉を誇張して、リズムよく語りに乗せて成功している。「[...] 彼等はおおいに私を歓迎して、私を「懐しい故郷の新聞」かなんぞのように取りまいて、にっぽん国の様子をきくのだった。／「飯は食ったかね、飯は。」／「ルウムは取ったかね、ルウムは。」／「なあに、スクウロがオウブンするまで、ステカラウンドしていたまえ。Easy, see!」／じい・ほいず！／これがわが親愛なるめりけん・じゃっぷの諸君だった。」（「じい・ほいず」『新青年』1927年9月，引用は谷譲次『一人三人全集Ⅲ めりけんじゃっぷ テキサス無宿』河出書房新社，1969年12月，p.184。／は原文改行）。英語の単語が訛って混じり、決まり文句もそのまま放たれる。しかもそれがアルファベットで示されたり、カタカナになったり、ひらがなになったりと、自在である。

### バイリンガルの表象

文体の話から登場人物の話につなげよう。文体レベルでのバイリンガル性を考えると同時に、登場人物の（話す言葉の）バイリンガル性というのを考えたい。移民地にいた人たちが多言語を使い、多言語状況の中で生きていたということと、その人たちを多言語使用者として描く／描かないということとはいったん分けて考えた方がよい。登場人物がいかなるバイリンガル話者なのかという問題は、表象の問題として考えなければならない。谷譲次の「めりけんじゃっぷ」は確かに日系移民たちの一面を捉えているが、当然誇張しながら伝えているのであり、「めりけんじゃっぷ」シリーズに出てくる人物たちが、移民地の居住者とイコールではない。

こう考えてくると、バイリンガリズムと文学を考える際に、バイリンガルの表象を考えるということが重要であることに気づく。

例えば、米国日系アメリカ人の強制収容所時代の文芸では、使用言語によって家族たちが分断されるようすが描写される。古川国雄の「短篇 残った者」（『ハートマウンテン文芸』1944年9月）では、母親は日本語しか話せない、兄は日本語がかなり話せる、弟は英語話者で拙い日本語しか話せない、という家族が描かれる。母親は息子（兄）の夫婦とキャンプ内で同居している。使用言語は日本語である。そこへ、デンヴァー付近に転住している下の息子から、キャンプを出て一緒に暮らそうという誘いが来る。母親は、結局日本式の生活を送れる、キャンプを選ぶ。実際にそういうことがあったかどうかということではなく、家族が分断されており、いかなる選択がなされるのかという物語を描くときに、バイリンガル状況がツールとして用いられていることに注目したい。人と人との間に横たわる分断や距離を表象するときに、バイリンガル性が利用されるのである。

水野氏が検討した例で興味深く思ったのは、純二世（米国生まれ米国育ちの日系第二世代）の詩「学校のひと時」というものである。「青い眼の先生は／日本語を知らない」という一節が

ある。これもやはり距離の表象であろう。私はこれを読んで、リービ英雄の小説「千々にください」(『群像』2004年9月)を思い起こした。同作は9.11の同時多発テロ事件を描いた小説だが、主人公は日本語と英語の翻訳をやっているアメリカ人とされている。彼はテロ事件に巻き込まれ、周囲が怒涛のように戦争に向かっていく状況の中で、自分をその状況から引き離そうともがく。そのときに彼が根拠としたのが、翻訳行為だった。主人公は、英語で襲いかかってくる外部の情報に対して、自分の内にある日本語で対抗する。バイリンガル性が、抵抗の拠点となる。

「青い眼の先生は／日本語を知らない」——。二つの言語を使えるということが、ある一つの言語が担う文化から距離を置く効果を持ちうるということをバイリンガルな主人公の表象は語っている。

### 贗のバイリンガル——おわりに

最後に考えてみたいのは、贗のバイリンガルの文学というものがあるのではないか、ということである。北米の例でいえば、ウィニフレッド・イトンという面白い作家がいる。彼女はイギリス人の父と中国系の母の間に生まれたが、Onoto Watannaという名前で、日本人を装って『*A Japanese Nightingale*』(1900)などの小説を書いた(ちなみに姉のイデイス・モード・イトンはSui Sin Farという中国系の名前で、やはり小説を書いている)。

あるいは「ハシムラ東郷」シリーズを書いた、ウォラス・アーウィンというジャーナリストもいる。最近宇沢美子による研究書『ハシムラ東郷—イエローフェイスのアメリカ異人伝』(東京大学出版会、2008年)が出てその詳細な検討が進んだが、これも著者が実際には日本人ではないのに日本人のスクールボーイのふりをして、おもしろおかしく日本人の語り、日本人の表象を行ったものである。言ってみれば、ある種の偽装である。

偽装されたバイリンガルは、エキゾティシズムを喚起し、笑いや風刺をもたらす。しかしそれだけではなかろう。それはたしかに偽物だが、そのあからさまな偽物性は、「本物」のバイリンガルの表象とは何かという問いを引き起こさずにいない。文学の表象は、それが文字による表象である限りにおいて、仮構を伴わざるをえない。移民たちが身を置いていた多様なバイリンガル状況を、はたしていったいどのような言語が十全に表象できるというのか。

それは文学による表象の限界ともいえるだろうが、ただ限界だけを言う必要もあるまい。強制収容時代の文学でも良いし、谷譲次でも、リービ英雄でも、ハシムラ東郷でもよいのだが、それらの文学に現れる、引き延ばされ、拡大された混淆的な多重言語の語りは、バイリンガリズムについての、文学ならではの視角をもたらすだろう。それは批評的な距離への知見かもしれないし、諷刺による現実の異化だったりもするだろうが、いずれにせよバイリンガルな文学の表象を分析することにより、我々は現代社会をますます席卷しつつあるバイリンガリズムの功罪を論じる手がかりをえることができるのである。

### 主要参考文献

伊藤比呂美「日系人の現在」『現代詩手帖』54巻9号、2011年9月

宇沢美子『ハシムラ東郷——イエローフェイスのアメリカ異人伝』東京大学出版会、2008年

バイリンガリズムと移民文学（日比）

- 篠田左多江「ウォーキン・ミラーの弟子 菅野衣川の生涯 -1-」『英学史研究』第27号, 1994年  
篠田左多江「ウォーキン・ミラーの弟子 菅野衣川の生涯 -2-」『英学史研究』第33号, 2000年  
日比嘉高『ジャパニーズ・アメリカ——移民文学・出版文化・収容所——』新曜社, 2014年  
藤澤全「前田河廣一郎の大逆事件批判小説の発掘——*The Coming Nation* 所載 "The Hangman" 全文【新資料】」『言語文化の諸相——近代文学——』大空社, 2004年  
水野真理子『日系アメリカ人の文学活動の歴史の変遷——1880年代から1980年代にかけて——』風間書房, 2013年

